

人生の愉しみ

kani++

何か面白いことはないだろうか？ 私は常に何かしていないといけない、という一種の強迫観念に囚われているのかもしれない。

することがないなら寝とけばいいのに、と思うだろうが、できない。もつとも、疲れていたり、薬の作用で眠い時は別だが。

小学生の頃、田舎で「イカの塩辛が好きです」と言ったら、「将来、酒飲みになるな」と言われたことがある。しかし、この病気は酒は控えた方がいいらしい。タバコを吸ったことはある。しかし、なにがいいのか分からなかった。なにかねえのか。

電子工作は複雑なものが作れない。模倣の域を少し出る程度しか設計もできない。プログラミングも大したものを作れない。小説を書くのが好きだが、これも箸にも棒にもかからないものしか書けない。

精華町に国立国会図書館関西館が完成した。友人に連れて行ってもらった。開架式の書架には、見たことのない文字が刻印された本が並んでいた。知的好奇心を揺さぶられた。

それからどれくらい経ってからだろうか。関西館に時折、足を運ぶようになった。バス代をケチるために、一つ手前で降りる。建物に入ると、警備員が一名立っていて、軽く一礼してくれる。駅の改札のようなゲートをくぐり、中に入る。閲覧席のPCで検索して、受付番号が表示されるのを待って、カウンターへ行く。

ある日、カウンターに美しい司書を見つけた。しかし、名札がよく見えない。何回か行ったり来たりして、なんとか読めた。「夏川さん」だ。話がしたくて、PCで調べて分かり切ったことを敢えて訊いてみた。

「『ラジオの製作』って本館にしかないのですか？ 読みたいんですが」

「えー、そうですね。申し訳ありません。本館のみとなっております。複写サービスでお読み頂くことはできますが」

「ありがとうございます」

私は急いで四階のカフェテリアに移動した。緑茶を買って、一気に飲んだ。「言えた！」

それから関西館に行く度に夏川さんの姿を探した。いない時もあったが、大体はカウンターにいた。なにも知らないふりをして、分かり切ったことを尋ねて、カフェテリアで緑茶を一気飲み。毎回、お決まりのパターン。

ロクに読めもしない、難しい工学書を閲覧したり、ある時は、文学書を一日かけて読んで、得意げに返してみたり。あの手この手を駆使した。

夏川さんの姿を見かけなくなった。十回連続で見かけないので、「これは大変だ！」と思い、カウンターの司書に尋ねた。

「夏川さん、最近見かけませんが……」

「ああ、あなた、よくお見えになる……。夏川は寿退職しました」

私は「寿退職」の意味が分からなかった。しかし、あのような文学書を閲覧する身分で、意味を訊いたり、辞書を引くのは憚られる。そこでトイレに行ってスマホで調べた。

「寿退職（社）・・・結婚に伴い、退職・退社すること。多くは女性で、専業主婦になったり子育てに専念するためであることが多い」

私は絶句した。トイレからロビーまで、必死になって感情を押し殺した。ロビーの椅子に座った途端、ダムが決壊したかのように、泣き崩れた。トイレで泣けば良かった、と後悔した。

ロビーの椅子で泣いていると、ポロシャツ姿の初老の男が近寄って来た。

「図書館で泣くなんて。どうしたの？」

私は、ことの顛末を話した。

「そういうことか。人生の愉しみを探しに来たら、夏川さんに出逢って、そして逢えなくなった。『時』が解決してくれるさ。ここにある無数の本や雑誌、新聞、論文、その他、読んでいるうちに忘れちゃうさ。人生の愉しみのヒントだっていくらでもある。何もここに来なくても、君の心の中では、とっくの昔に『自分が何をすべきか・したいのか』結論は出ているはず。あとは『素直になること』だ」

手渡されたティッシュで鼻をかんだ。

「メーテルリンクの『青い鳥』は読んだことあるかい？」

「チルチル、ミチルが出て来る本ですか？ 読んだことはないです」

「読み易いから、一度読んでご覧なさい。さあて、調べ物の続きをやるか」

落ち着いて来た。カフェテリアに行って、水を飲んだ。警備員に会釈して関西館を去った。しばらくの間は来るのを止めよう。

地元の図書館に向かった。

※この作品はフィクションです。

人生の愉しみ 2021年 9月 1日 初版発行  
2021年 11月 3日 第二版発行

©kani++ 2021